

聖書：コリント人への手紙第一 13：8～13

説教題：一番すぐれているのは愛

日時：2022年12月4日（朝拝）

「愛の章」として有名な I コリント 13 章の後半です。この手紙が宛てられたコリント教会のクリスチャンたちの間には御霊の賜物を巡って混乱がありました。神は、からだが必要な部分からなっていないながら全体で一つであるように、一人一人に異なる賜物を授けて、彼らが互いに組み合わせられて豊かな一致に生きるようにと招いておられました。しかしコリント人たちはお互いの賜物の違いに注目し、それに優劣をつけて互いに誇ったり、見下し合ったりしていました。特にその中心にあったのは異言の賜物でした。しかしパウロは前回、愛がなければこれらは無に等しいと言いました。どんなに優れた知識や信仰の賜物が与えられていても、愛がないなら何の役にも立たないし、何の良いこともないと。一言で言えば愛の不可欠性ということです。賜物は愛という道を踏み行くこととセットで考えられなければならないということです。

さて 8 節以降で述べられているのは「愛の永遠性」対「御霊の賜物の一時性」です。8 節最初に「愛は決して絶えることはありません」とあります。つまり愛はいつまでも続くということです。愛は永遠であるということです。途中で消えてなくなることはないということです。これと比較されているのは御霊の賜物です。その中から預言、異言、知識が取り上げられています。これらはやがてすたれる時、終わりになる時が来ると言われています。それはいつなのでしょう。10 節に「完全なものが現れたら」とあります。これは救いの完成の時と言えます。イエス・キリストの再臨の日です。地上の歴史がゴールに達して天の御国の生活が始まる時です。その時にはすたれると言います。これはどういうことなのでしょう。

預言とは神の言葉を預かって語ることで、特に新約聖書が完結するまでは神の啓示を担う働きをしました。この預言は救いの完成の日が来たら不要になります。神の教えを知るために媒介する人を必要とする状態ではなくなるからです。後から出て来ますように皆が十分に神を知るようになるからです。異言も同じです。異言は 14 章でもう少し詳しく語られますが、解き明かしを必要とするもので、特に新約聖書が書かれた時代に特有な聖霊の現れでした。これも一種の啓示の役割を担うものだったと言えます。これもやがての天国では不要になります。三つ目の知識も同様です。これは

天国では知識がなくなるという意味ではありません。これは御霊の賜物としての知識のことです。教会が真理に精通し、真理に従って生きるために御霊が教会に与えておられる賜物です。しかし天国ではこのような賜物が特別にある人にだけ与えられるという必要性はなくなります。一人一人が十分に主を知る者となるからです。ですからこれらの賜物はやがての日までの一時的なもの、期間限定のもの、後の日にはすたれるものということになります。

これはコリント人たちにとって衝撃的なメッセージだったのではないのでしょうか。彼らは異言を話す人は天のレベルに達していると考えていました。1 節に「御使いの異言」という言葉が出て来ましたが、その人は天使のレベルにまで到達している特別に霊的な人間だと思っていました。ところがパウロは異言等の御霊の賜物は完全なものが現れたら過ぎ去ると言います。それらは来たるべき世にはないというのです。ですからそれらを頼みとし、それらを誇りとして生きるべきではないことになります。もっと大事な、いつまでも残るものにこそ目を留め、それを求めて歩まなければならないということになります。

9 節に「私たちが知るの是一部分、預言するのも一部分であり」とあります。確かに私たちが地上で知る真理は全体のごく一部分でしかありません。神学校に行って博士号を取ったとしても同じです。預言することも同じです。膨大な神の世界のほんのわずかな部分を話しているに過ぎません。10 節にある通り、「完全なものが現れたら、部分的なものはすたれる」のです。それまでのものはもはや役に立たなくなり、出番がなくなり、お役目終了となるのです。ある人はこれは太陽が上ると、すべての光が意味のないものとなることに等しいと言っています。朝が来て太陽の光が照らすまでは、色々な光が助けになります。暗い夜は小さな光でも重宝します。しかし太陽が顔を出してすべてのものを照らすと、それまで活躍した小さな光はほとんど意味をなさなくなります。御霊の賜物も完全なものが現れたらお役目終了となるのです。

さらにパウロは 11 節と 12 節で二つの例をあげます。まず 11 節は「幼子」対「大人」のたとえです。幼子には幼子の優れた点があります。イエス様も幼子を人々の前に立たせて、この子どものようにならなければ天の御国に入ることはできないと言われました。しかしここでは「幼子として話し、幼子として思い、幼子として考え」とありますように、話したり、思ったり、考えたりする面が注目されています。この点

について幼子は大人と比べたらやはり不完全であると言わなければなりません。未熟と言わなければなりません。子どもの時はそれでいいですが、大人になったら幼子のような考え方はもうしません。その時期、その時期に合ったあり方があります。預言や異言や知識の賜物も同じであるということです。今の時代には良いことであり、必要なことであっても、やがては不要となるもの、捨て去るもの、過ぎ去った時代に属するものとなるのです。

2つ目のたとえとして12節に「鏡」が出て来ます。鏡は大切です。自分の顔をチェックできますし、色々なものを映し出してくれます。昔の鏡は今のものほどきれいに映るものではなかったことを考えれば「ぼんやり」と言われていることも、そうだろうと思います。しかしたとえどんなにきれいに映る鏡があっても、誰かと顔と顔を合わせて見ることと比べたら比較になりません。それは間接的に見るのか、それとも直接的に見るのかの違いと言えます。今日なら鏡の代わりに写真を考えても良いかもしれませんが。私たちは写真を通して多くのことを知ることができます。お見合い写真もそうですが、まだ会ったことのない人でも写真を通して多くの情報、またイメージを持つことができます。ところが実際にその人と会うと、写真の印象と全く異なるという経験をするのが私たちにもよくあるのではないのでしょうか。写真で見ると、実際に顔と顔を合わせて見るのとでは、やはり大きな差があるものです。

ここに「顔と顔を合わせて見る」と言われていますが、誰とそのようなことがここで考えられているのでしょうか。それはこの後、「私が完全に知られているのと同じように」とありますように、私を完全に知っていてくださる方、神と会うということでしょう。私たちは今、神のことを一部分しか知りませんが、やがての日には「私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになる」と言われています。改めて思うことは、今私は神に完全に知られているということです。神に知られていないことは何一つありません。隅から隅まで知られています。ある意味で恐ろしいことでもあります。それ以上に私のすべてを知った上で今日も私の神でいてくださる神であることを覚える時に、恐ろしさ以上に喜び、感謝、平安、賛美が沸き起こって来ます。神の知識は完全なものです。そしてやがての日には、同じように私も完全に知ると言われています。これはもちろん私たちが全知全能になるとか、私たちが神になるという意味ではありません。これは今の私たちにある様々な誤りや限界が取り除けられ、人間に許される最高レベルの神知識に到達するということでしょう。昔、モ

モーセは主なる神に「あなたの栄光を私に見せてください」と願いましたが、主は「人はわたしを見て、なお生きていることはできない」と言われました。モーセは岩の裂け目に入れられ、そこを通り過ぎた主の後ろを見ることだけが許されました。しかしヨハネの黙示録 22 章 4 節には、新しい天と新しい地で、神のしもべたちは神の御顔を仰ぎ見ると言われています。今、私たちは聖書を通して、ある意味で断片的に、神の栄光の輝きの一部分を垣間見て、この世にはない感動と恐れと喜びを味わっていますが、やがての日は直接神を見られると言っています。その時には、今の私たちにある神知識の誤りとか誤解等はすべてなくなるのです。まさに完全に神を知ることになるのです。そして確かにその時には預言や異言や知識の賜物のいる場所はなくなるのです。それらは必要ないものとなるのです。

最後の 13 節は結論です。ここにいつまでも残るものとして信仰、希望、愛の 3 つがあげられています。なぜ 3 つなのでしょう。これはこれまで預言、異言、知識の 3 つがあげられてきたことに対応して、ということかもしれません。またこの 3 つは聖書の様々な箇所と一緒に出て来ます。アウトラインを記した紙に、そのいくつかの箇所をメモしました。後でそこを開いていただければ、いずれの箇所にも信仰、希望、愛が出て来ます。これらはいつまでも残るもの、天国でも永遠にあるものと言っています。

ある人は天に行っても信仰はあるのかと問うかもしれません。Ⅱコリント 5 章 7 節に「私たちは見えるものによらず、信仰によって歩んでいます。」とあります。しかし天に行ったら神を直接仰ぎ見るのだから、それはもはや信仰の歩みとはならないのではないかと。しかし信仰とは神を信じ、神に信頼する人格的交わりに生きることですから、そういう意味で信仰は天国に行ってもあると言えます。むしろ来たるべき世界で益々神への純粋な信仰に生き続ける者になると言えます。同様にある人は天国に希望はあるのかと問います。ローマ書 8 章 24 節に「目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。」とあります。天国は私たちの望みが実現する場所ですですから、そこに入ったら、それ以上何かを望むということはないのではないかと。確かに天の御国において私たちが待ち望んだ希望は成就します。しかし先に見た通り、天国でも私たちは日々神に信頼します。その神に信頼する生活にはいつも希望がセットなのです。ですから天国とは最高の高みに達して、あとは単調な生活が続くという場所ではないのです。天国の生活は常に明日が期待に満

ちている生活です。それは無限の神、私たちが知り尽くすことのできない神とともに歩む歩みだからです。神に信頼して毎日希望を新たにしている生活が私たちが待っているのです。何と素晴らしいことでしょう。そして三つ目に「愛」が述べられています。そしてこれが三つの中で一番すぐれていると言われます。なぜでしょうか。それは愛が最も根本的なものだからであると考えられます。聖書に「神は愛だからです」という言葉がありますが、信仰と希望はそのようには言われていません。神は信仰に生きていますか、神は希望に生きていますとは言われていません。しかし神は愛であり、愛に生きています。この神の本質的な性質である愛が天国においていつまでも続くことは当然のことと言えます。この神の愛はヨハネの手紙第一4章7～10節にある通り、私たちの救いのためにご自身の一人子を遣わして十字架にまで送り、贖いのみわざを成し遂げてくださったことにはっきり示されています。その神の愛のみわざに基づいて、その神に対する私たちの信仰があるのですし、またその神に信頼する希望があります。これらは永遠においても続くものです。しかしその中でも神のご性質と直接関わる愛が一番すぐれているものなのです。ですから御国を目指す私たちは、これこそを求めべきです。神にいよいよ似る者となって行くことです。次の14章1節も「愛を求めなさい」という言葉をもって始まります。

私たちは日々何を求めているのでしょうか。私たちの生活の中には、やがてすたれるものと、いつまでも残るものがあります。やがてなくなり消え去るものと、いつまでも続くものがあります。今日の御言葉を讀んだ私たちが自らに問うべきは次のことではないでしょうか。それは私はやがてなくなるもののために一生懸命になっていることはないだろうか。やがて消え去るものに重きを置いて、それで自分を誇っていることはないだろうか。しかしそれらがすたれる時、しぼんで消え去る時が来ます。それでも私たちは大丈夫でしょうか。自分が頼みとしたものがなくなって、神から「あなたは地上で一体何をして来たのか。あなたの一生は何だったのか。」と問われるということはないでしょうか。コリント人たちは御霊の賜物を誇り、自慢していましたが、それらは天の御国には持って行けないものです。その賜物の上に自分の人生を築き上げていると、最後の日に大変なショックを受けることになります。そうではなく、私たちはいつまでも残るものを求めて歩みたいと思います。それは信仰と希望と愛です。日々神に信頼して従うこと、日々に神に望みを置いて歩むこと。そして何よりも「神は愛である」と言われる方を見上げ、その神に似る者へと変えられて行く道を進むこと。この道を進むことの中で賜物のことは考えられるべきであるとパウロは言っている

ます。私たちも自分に与えられている賜物を、このみことばの光の下で捉え、御心にかなう歩みをささげる者でありたいと思います。賜物によって自分を誇り、自分を持ち上げ、自分に栄光を帰すのではなく、共同体全体の益のために、人々の祝福に仕えるために、愛という道を進む中でそれを発揮する者でありたいと思います。そうする人はやがて完全なものが現れて御霊の賜物が終わりとなる日が来て何も失いません。その人は神が授けてくださった賜物を正しく用いて、いつまでも残るもののために歩んだ人として神に高く評価されることになります。愛である神ご自身に似る者となる道を進んで来た者として神に喜ばれ、御国においても続く、さらなる信仰と希望と愛に生きる祝福へ導かれる者となるのです。